

特 55

975

外 國 船

久 保 猪 之 吉

謹 呈

帝 玉 國 書 館
中



始



外國船のはじめに



昭和八年の年頭に發表した十首の歌は思ふ所ありて、ねられぬ
夜半によみ出でたるものである。耳鼻咽喉科教室滿二十六年記念
に當りて知友諸氏に願つため、外國關係の隨筆數篇と合せて
に附した。一片耿耿の志やみがたきもの、敢へて賢察に委する。

著者寄贈本

昭和八年三月

福岡にて

著者



目次

一年頭言志 一

一 獨逸より見たる戦争雜観 三

一 外 國 船 五

一 國 境 一〇

一 忘 れ 物 一五

一 道富丈吉の墓 一九

一 洋 傘 二五

一 マジヤルの首都ブダペストより 三一

新編海防

外 國 船

久保猪之吉著

年頭言志

我ひとりおほやけ腹を立てむともかひ無きものと知りはしりつゝ

御民われかゝる時世ときよに生れあひて逢ひしかひある一人ともがも

書讀みて涙流しゝいにしへの赤心ま人にわれおとらめや

まめやかにくすしの道はふめれども世の行末を思ひみだるゝ

民草を導くほどの人ひとりしきりに欲しとおもふ頃かな

大臣等よ國を誤ること勿れ神の肇めし神ながらの國

肱取りて力合せむ隣人はなれ行く日の恨めしきかな

唯ひとり妬みそねみの中にありて呼べども人のうべなはぬかな

一大事せまるが如し花鳥をうたひてあそぶ時とおもふな

わが叫ぶ正しき聲にしたがひて世界の動くその時やいつ

(九州日々新聞昭和八年一月一日發行及心の花昭和八年二月號)

獨逸より見たる戦争雜觀

(伯林にて一九〇四年)

▲去る二月日露談判破裂の號外を得たる翌朝なりき、予は例の如く病院に出勤し、教授に面せり、教授耳語して曰く、愈日本は武力に訴へた、予は君の爲に賀すべきか悲むべきかを知らずと、予の同輩者又皆曰く、予は日本の爲に勝たんことを禱れども其結果日本が臺灣を取らるゝやうなことゝなるべしと、知人の云ふところ皆此の如く、中にはこれ日本は自滅を招くなりとまでに云ひ、誰か又一人の日本の勝利を豫測せるものあらんや、實に心細き有様なりき。

▲されど、心中に頼むところある予は、密かにこれらの批評を冷笑し、日本人の忠君愛國心はかくまで脆きものに非るを自信し、且つ決して戦鬪にひけを取る國民に非るを自信したりき、獨逸の如き武國すら、軍人は機械的に進歩せるも、高尚なる裝飾品に過ぎずして、能く舞ひ、能く歌ひ、能く女を弄す、戰場に臨んで身命を鴻毛の輕きに比し得べきか否かは今の獨逸武人に取ては疑問なり。

▲果然、日本の勝利は日を経るに隨ひ確實となれり、露國のやり方が如何に小兒らしく大人氣無きかが明かとなれり、日本の爲に悲みしものは日本の爲に賀し、悔りしものは驚けり、最も著しきは新聞紙の論調にて先きには日本人のことゝ云へば一も二も無く信を措かざりしもの、今や露國の報告に對して悉く疑問記號を以て掲載するに至れり。

▲又著しきは繪葉書の變化なり、初めは日本を小さく露國を大きく書きて、螻蛄の斧に向ふが如きを諷したるものゝみなりしが、今日は一として露國に對する輕侮に非るはなし、其の一例を擧ぐれば日人が鞭一條にて白き熊を自由に使ふとか、露人が鐵鍋に吊されて下より火を焚かれて火責に逢ふ有様（これは旅順を意味す）などの圖なり。

▲更に興味有りて吾人をして快哉を呼ばしむるものは、戦争地圖の變遷にて、開戦當時出版者は皆當て込みて日本の必敗を豫想し、露軍の追撃を疑はざりし爲め戦開地圖製造の主點を日本の沿岸と朝鮮のみに置きて製造せり、故に東京、灣、長崎、佐世保、函館の如き精細なる特別地圖を附記しあり、然るに何ぞ計らん旅順破れ、浦塩艦隊討たれ、三十六計の奥の手、北へ北へと逃げ出したるが爲、先の地圖は全くの當てはずれ大損を招きたるこそ小氣味良けれ、此一事は以て獨逸人が如何に初めに日本を見くびりたりしかを知るに足るなり。

▲さるにてもマダ露國の夢の醒めざるは驚き入りたることにて遼陽我手に落ちたる後、ノゾオエウレミヤ通信員の減らず口に曰く

我露軍を以て日本と比較するは笑止千萬。露國の古武士たるや百年に近き間、韃靼、波蘭、土耳其、瑞典諸國と干戈を交へ、身は刀瘢を以て固められ、甲冑は敵味方の血漿にて飾らる、向前無敵の勇者なり、彼れ日本人何者ぞ、恰かも卒急に間に合はされたる曲藝動物、所謂猿猴にて冠するもの、

見世物の奇物のみ、眞に奇なるは此の人種、誰かかゝる動物の功名が永續するを信ずるものあらんや、今や彼等は支店を設け店員を出張せしむる如く占領地を經營して得々たるも、畢竟雨後に簇生したる菌類なり、たゞちに腐らん、又喩へば光彩陸離の石鹼珠が其美其大極度に達したると同様、其の破裂は遠きに非ず。

と、獨逸の新聞は之を冷評して曰く、云ふところ何ぞ奇抜なる、されど古武士を以て誇る露人よ先づ其の筆を暫く傍に捨て、何ぞ汝の誇りとする鐵の如き武装を見せしめざる！

（新公論二〇ノ一、明治三十八年、一月一日）

外國船

米國經由で歐洲へ旅行したのは、丁度米國で日本移民排斥の高潮の時であつた。横濱から乗つた船は、米國のプレシデント級のもので、歸朝してゐた日系米人もこれで渡米しなければ入國の効力がなくなるといふ、きはどい最後の船であつた。外國船は何かにつけて窮屈にちがひない。日本船の方が自由でのんきでいゝぢやないかと、友達も皆云つてくれたのだが、自分はわざと米國船を撰んで見た。それにはどういふ風に日本人を取扱ふか、移民でなくとも排斥されるのか、一番試して見やうといふ

氣も大分手傳つた譯だ。

併しこの船は最後の便船といふ爲に非常に日本人が多く、三等などは溢れる位の乗客でその検査に手間がかかり、出航が豫定よりも三時間延びた程だつた。従つて一等にも日本人が割に多くゐて、別にこれといふ不快の感じもなかつたし、虐待といふやうな事もまるで無かつた。途中緯度が急に高くなつた爲風邪をひいた時のボーイの介抱ぶりなど、實に行届いたもので満足だつた。

併し勿論米國船だから、表面上禁酒令は勵行されてゐた。いよ／＼明日シアトルに着くといふ前夜最後の晚餐の時、或西班牙人が、少し酒氣を帯びて、新聞に包んだ瓶を食堂に持つて來て食卓にのせた。それを見つけた給仕長は早速取り上げてしまつた。とり上げられた當人の苦笑が氣の毒だつた。だがこの瓶も取り上げられ放しになつたかどうか、たぶんはその客のキャビンに返されたものらしい。公然と食堂でさへ飲まなければ、キャビンでは大抵自由らしかつた。現に自分と同室の某氏なども、福神漬などを肴に、ポケットウキスキーを毎晩寝がけに飲んでゐたやうだ。

米國の船中に限らず、米國自體でも禁酒令には不可解千萬の點が多い。大分裏表があるやうだ。困るのは貧乏人だけで、金持は痛痒を感じない。労働者階級に禁酒させて、能率を高める政策のやうにも見られる。

禁酒に伴ふ密輸入も夥しく、中には制限外の海にウキスキー壺を投げこんで置けば、夜半モーターボートを出してそれを拾ひとるといふしくみもあると聞いた。それだから此種のウキスキー瓶にはレツテルが無いさうだ。警官もその監督官もすぐ買収されるから、監督の上に監督が入り、そのまた上に總監督がいる有様だとも聞いた。

米國の理想としては、今の禁酒令が現代にはあまり効果が無くとも、一代二代と經つうちには、全く酒の味を知らない人間をふやして、しまひには、ホントに眞面目な禁酒國としやうといふにあるらしい。その理想がうまく實現するかどうか。とにかく今の米國は禁酒の爲税はとれず、經費はかゝる中々厄介らしい。それにも拘はらず斷行した所が、米國の米國たる所だ。

大西洋を英國へ渡る時、ニューヨークからHといふ巨船に乗つて見た。何でも世界一のすきな米國人のこれは二番めの船である。自分もその世界一といふのに乗つて見る積りで、大分クック會社と交渉したが、あいにく夏期遊覽の時期だつた爲、割増つきを承知の贅澤な遊山客でずつと前から満員といふ事で、どうしても部屋がとれなかつた。Hも併し可なり大きかつた。Aデッキから、Fデッキ位まであつた。同じ一等室でも位置のわるいのは、少し波があれば、海中に窓が沈み、あける事が出来ない。電燈なしでは晝も眞暗の事がある。少しい部屋はすぐ割増金がつく。幸ひ自分の部屋は海の中

には沈まなかつたが、いゝ部屋は皆米國の千萬長者が占領して贅澤の限りを盡してゐた。日本人はあまりゐなかつた。

乗つた翌朝、遊歩甲板ブレイクに行つて注文して置いた自分の籐椅子を探し歩いた。番號姓名を記した籐椅子が、南側にも北側にもズラリと並んでゐる。漸く探しあてた自分の籐椅子は、その暑い南側のなかにあつた。右にはフィリピンあたりの人らしい色の黒い人が腰をかけてゐる。左はあいてゐるが、間もなく日本人らしいのが來たから日本語で話しかけたが通じない。英語は分る。支那人だつた。

その隣はロシア人のやうな太つた男であつた。「ア、コレダナ」と、いつか聞いた同僚の經驗談を思ひだした。日本人の籐椅子は、冬は寒い北側、夏は暑い南側に支那人と一緒に置かれ、甲板上では全然差別待遇を受けるといふ事をその人は憤慨して話してゐたのであつた。自分は例の負けじ魂から、甲板給仕デッキスチュワードを呼んで、南側は暑いから、北側に席を移してくれと談判した。はじめはグズグズしてゐたが、到頭翌朝までに移す事を承諾した。

さてその翌朝、主張の通つた一種の誇りをもつて、自分は北側の籐椅子に納まつてみた。涼しい事は涼しい。孔雀のやうに着飾つてゐる婦人連も美しい。が併し、その婦人連をあがめ奉つて御機嫌をとり結ぶ白人の群のなかに、たつた一人顔色の違ふ自分は、誰からも話しかけられず、唯ぢつと窮屈を忍んでゐるより外なかつた。

○
食堂の座席をきめるのは、給仕長ホーデルの役である。風采の立派な偉大な彼は、食堂の前の廣間に大卓子を控へて、その上の食卓配置のプランを睨んでゐる。客は一人一人彼の前へ往つて、希望を述べるのであつた。おとなしく黙つてゐると、日本人には人の眼につかない隅の方か、出入口の雜沓して落付かない場所かゞ與へられると豫て聞いてゐた自分は、早く行つて比較的、場所の四人組の小卓子を選んだ。相客の一人は日本の留學生のB氏とさめて、あとの二席は語學の稽古といふ點も考慮して外國人を一緒にしてくれるやう希望して置いた。晚餐の銅羅が鳴る。食卓について見ると、用意は四人分出來てゐる。どんな人が來るのかと、或る興味を以て待つてゐたら田舎の老夫婦らしいのがやつて來た。先客の自分たちに形式的の挨拶一つするでもなく、ニッコリともしない。こちらから挨拶する譯もないから黙つて食事にかゝる。到頭食事中雙方無言である。これでは語學の稽古どころではない。食堂を出る時B氏と相顧みて苦笑した。この老夫婦翌朝も晝も顔を見せない。用意も二人丈してある。甲板を散歩する時その老夫婦にバツタリ行きあつた。

晚餐にはナフキンが三人分になつて、卅四五の猶太型の男が來た。今度は一つ負けて置いてやれと思つて、話しかけたがろくな返事もしない。時々横目を使つて自分達を見るだけだ。これぢやいよ／＼たまらない。こちらから願ひ下げだと思つてゐると、この男も一度だけで逃げてしまつてB氏と

二人きりの食事が二三日続いた。

そのあとに來たのは顔の色の黄いろい背の高い瘦形の若い紳士で、ニコ／＼しながら、流暢な英語で挨拶した。日系米人か、雜種かと思つてゐたら支那の醫學士であつた。この人は數年前ロンドン大學を卒業し、北京の大學に重要な位置を占めてゐるさうで、話もよく合ひ、ロンドンまでよき道連れであつた。やつぱり皮膚の色がちがつては一緒になれないんぢやないかと思つた。

(一九二七、二、二二) (ホト、ギス昭和二年四月號)

國 境

ブリンジジに著いた日は馬鹿に暑かつた。コロンボでも、かうは暑くなかつた様だ。ことしは夏知らず、冬知らずにすむと思つて北の方から段々と十月を目がけて南に來たが少し早過ぎた。尤もウキーンのゼンメリングといふ田舎には此一週間ばかり前に雪が積んださうだ。まだ十一時にしかならないから、早く税關をすませて宿屋に入つて休まらうと思つた所が、税關で思ひがけない面倒が起つた。自分は四つの荷物をもつてあるいて居るが、何處でも一つよりしかあけさせられたことは無い。こゝでは三つもあけさせられた。ブスブスイひながら、しつかり詰め直して革紐のビジョウを二つも締

めた。これはマルセーユ上陸の時荷物がふれて困つた爲、安物を買つた報いで、手に提げる所が、カバンの本體からブツツリ切れたから書物が這入つて重いカバンの提げ所がない。これはブレスラウの宿屋に著いた時、自分の室に持ち込んだ若い男が亂暴に扱つたから切れたのだ。しかるに彼の言ひ草がよい。此カバンは品物がわるいから切れたと。そして一言わるいことをしたといはない。切れるのが當然のやうな顔をしてゐる。小にくらしかつたから酒手をやる氣にならなかつた。急に思ひついて丈夫なビジョウを二本かつてそれではつて、提げることにしてバルカン半島の旅行は終へたのだ。此カバンをあけさせられると困るなと思つて旅したが、六ヶ國の國境に於て未だ嘗て此カバンを開けるといはれたことがなかつた。しかるに、今日は此カバンを眞先にあけるといふ。尤も此カバンは自分の持ち物の中で最も大きく、最もわるく又最も不體裁に二つのビジョウでくゝられて居る何か商品でも入つてるかと疑へば疑へぬでもない。しかし實際の處は課税すべきものは何もないのだ。唯ビジョウを二つもしばり直すことが億劫なのだ。これでよいかと思つたら又次々とあけさせる甚だ氣持のわるい税關だ。よしと言つて褐色の白墨でカバンの上半分位に奇麗にはりつけてある旅館のレツテルの上もかまはず横文字を一つ大きく書く。實に殺風景な税吏である。土耳其でさへも美しい印紙みた様なレツテルを張つてくれたのに。自分はベデカアや時間表や辭書を包んだ三越の十二支の青い風呂敷包を一つ携帯して居る。それは何かといふから本だといつた所、無暗に上からひしぐ。

そして風呂敷包の底に又例の大きい横文字を一つ書いた。今迄風呂敷包に印をつけた所はなかつた。瑞西の如きはプロフェッソールの名刺を見て敬禮して、あけるのを中止してくれた。宿屋の制服着た男が之ですんだといふから、馬車を頼んで乗つて行く。荷物も積んで。此處の税關といふのが、船つき場からうんと離れて誠に不便なのだ。途中に自分のとまる宿の入口があるから一寸入つて室を注文して行かうと思つたら、劍をつけて居る税關の番人におこられた。検査がすまないと宿屋にも立ちよれない。さて検査のすんだ荷物の馬車が宿屋に近づくと一人の人相のわるい老赤帽が追つかけてくる。目を真赤にして怒鳴り立てる。馭者を捕へて何かいふ。宿の番頭ともいひ争つてる。恐らくは金がほしいのだらうと思つて財布を出してやらうと思ふと、宿やのものが、さうでないと言ふ。その男の爲に馬車は又引き返させられた。今度は税關の横道にある小屋から二三人出て来て、いきなり又ビジョウのついたカバンを提げて行く。カンカンにかけて目方を計つて居る。その中、宿やの制服が、又ビジョウを解きはじめる。ビジョウをといても鍵をかけて来たから開く譯がない。自分に鍵をあげよといふ。馬車の上から見て少しむつとした。「もうすんだ、白墨の記しがついてるではないか、何遍あけるのだ」と怒つた。そしたら、サッキのは伊太利國境の税關、此はプリンヂー市の税關だといふ。實にうるさい所だ。こんな所には二度と来まいと思つた。後に蝶捕に隣村に往つてかへる時、ヨボくの老爺が町の入口で自分の馬車をキヨロキヨロのぞき込んだ。なる程、町の四方八方に税關があるのだ。

あすは五時半の汽車でナポリに立つのだから四時半に起してくれ、馬車は五時に頼んでくれと命じた。自動車などはないのだ。朝食はいらぬが茶かコーヒーが出来るかといふとあまり早いから出来ぬといふ。宿屋は客を扱ふのが商賣だ、客が早かつたら宿屋も早く起るといふのが日本の情のある所だが、西洋にはそんな事はないのだ。よし、朝食は汽車でどうかなるだらう。まあ卵子を三つ半熟、それに「シンケンプロート」を頼む。果物はと聞くから、あんな堅い梨はいらないと断る。水はといふ、途中にあるだらうと之も断る。二段も階段を下つて浴室に入つて、あすの朝の代りに髯を剃り、早く寝る。水道もないから水は入物に入れて室にもつてくるのだ。蚊帳がついてある。これは困つた蚊がをるか。蚊は希臘の Dengue 熱を傳搬した奴だ。自分が希臘に下船しなかつたのも此病氣のある爲だ。若かすると船について来た蚊が、此港に居りはしないかと不安の念にかられた。それに何か南京蟲の居り相な氣持がした。「フリット」をかつてまくのだつた。しまつたな。せめて電燈でもつけてねやうと思つたが、かやの外から照すのだから光は不充分だ。まあ大したこともあるまいとねる。何遍さめるか分らない。手がかゆい、顔がかゆい。蚊が蚊帳の中ををるのだから、たまらない、白蚊帳の中だから、すぐ見付かる、つぶすとかやが真赤に染まる。もう大丈夫とねると又さされる、又赤い太い腹の奴をつぶす。十二時になつた。目をさますのはよいが寝過したら大變だと思つた。一時に又さめ

る、よく見ると丸い蚊帳を四角の寝臺の周圍に張つたから下の裾はツンツルテンで下から蚊がいくらでも這入つてくる。そこで四方の裾を引き上げ藁蒲團の間にはさんで寝た。四時二十分に目がさめた。おきた。四時半におこしに來た。これなら茶位は出来るだらうと憎らしくなつた。實際、日本に居つた時でも朝食をくはずに旅立つことは無い。五時には馬車やの鞭の音が聞えた。昨日蝶捕に乗つてやつた馬車屋だ、四階の窓から「ボン、ジョルノ」と聲かけてやつたら脱帽して敬禮するらしい。満月の有明月が埃にまみれた橄欖樹の並樹の上にあつて世界はまだ暗いのだ。

停車場につくとやゝ白けて來た。お腹がすいて來た。タラント驛迄我慢しやう、コーヒー位はあるだらうと思つた。此列車は一等車もあり、ナポリ迄一日走るのに食堂車がない。どこの停車場でも物うりといふものが居ない、不思議の國だ。獨逸などはどんな片田舎に往つても、ブラットホームで、食料、飲料、新聞を車に積んで小綺麗にしたのが賣つて居る。耐らないから、宿屋でくれた辨當をひらく、卵子を破つたら殻の所迄黄色になつてくさい。こんな腐つた卵子は始めてだ。窓をあけてすてゝ、又腐つてる。三つともくへぬ。しかたなしに、カンカラカンに乾いたバンの一片をかじる。一片しかくれないのだ。水がないから、お腹がすいてもくへない。朝食一遍位くはなくともよいわと眠る。日がさして暑い。

いつも一等車室は人が少いから獨占だ。いや、度々人が來るが、自分の顔を見て隣の室に逃げて行く。ある停車場で若い夫婦が來た。亭主が入る。嫁が顔をしかめて出た。亭主も隣の室についた。自分の室は禁煙室なのだ。こんな具合で誰も來ないことが自分には非常に都合がよい。その間に考へたり、俳句を作つたり詩を作つたり色々する。自分には孤獨がよい。それで收穫があるのだ。所が此日に限つて元氣が無い。一人で居つても俳句一つ考へる意氣がない。さては夕べさした蚊が、デング熱を傳染した前徴ではないかと案じはじめたが、晝飯にありついたら、スツカリ元氣が恢復した。

(昭和三、一〇、四、ナポリ發前) (ホト、ギス昭和四年十二月號)

忘れ物

忘れるといふことは睡ると同じで生理的のものらしい。随分むらい學者にも忘れるといふことはよくある。有名なウキルヒョウ先生は友人の家に禮服をかりに立よつてつひに結婚式に出るのを忘れたといふ話だ。自分の師匠キリアン先生はよく洋傘を汽車の中に忘れる癖があつた。自分は西洋には度々往つたが、今でも忘れられない忘れ物が二度あつた。

數年前のことだが土耳其からイタリアのブリンヂ港に入り、それから羅馬に直行した。途中乗換

があつたり食堂がなかつたりして不便であつた。停車場には到る所に兵隊ともつかず、役人ともつかない制服制帽の青年が居つて色々世話をして居る。時には列車の中に這入つて来て切符の検査迄して居る。後に聞けば之はフツシストの人々だといふことである。随分暇な人が多いものだ。若い年をしてブラ／＼して居るものが多いのだと驚いて居る内に羅馬に近づいた。

羅馬に著く二つか前位の停車場から無暗に人が入り込んで来た。自分の室は一等だから二人丈乗る所に赤子を連れた若い夫婦ものが入り込んで来た。自分は赤坊は好かない。それがよく泣く、その内に女は羅馬驛に近づいてきたので子供を自分の脇にねかしておしめ換を始めた。黄色いものがあり／＼見わた臭氣も甚しい。かの女は黄いもので汚れたおしめを棚の上の袋の中に押し込んで自分のカバンの上のせる。自分は逆もやりきれず席も何も放棄して戸口の所に立つて早く羅馬に著けばよいと外をみて居つた。

羅馬の停車場に入ると例のフツシスト連がどや／＼と廊下に入り込んで来た。自分は逸早く窓から「フワツキノ！フワツキノ！」と赤帽を呼び、荷物を渡して一目散に出口に向つた。中々長いプラットフォームで出口迄行かぬ内に思ひ出したのは洋傘を忘れたことだ。しまつた、忘れた。伊太利の汽車に物を忘れたら最後返つた例がないといふことはよくキリアン先生から聞かされて居つた。たうとう先生のまねをした。しかし今戻つて往つたら洋傘はまだ棚にあるだらうと思つて駈足で自分の乗つて居つ

た箱に往つた。中にはあの夫婦がグズ／＼して居る。棚をみたら自分の洋傘は無い。廊下にはフツシストがいくらもうろついて居るからかの義勇兵に頼んだらすぐ分るだらうと思つて尋ねたら彼は知らぬといふ、しらぬ筈はあるまい、今迄自分がこゝに置いて同室の人もまだ下車せずに居るではないか、知らんといふ法はあるまいと議論して居ると列車の後方から傘や洋杖や古新聞や古壘などを一抱にして持てくる義勇兵があつた。呼びとめて、その傘はおれの傘だ返せといつたら、これは列車内の遺留品だ、請取るなら正規の手續をして明日××局に請取にこいと云ふ。コラ亂暴者！その傘を返せ、まだ荷物も片付いて仕舞はず、旅客もプラットフォームに居るのに遺留品とは何か、己の傘を返せといつても、どうしても渡さずサッサと引上げてゆく。驛長を呼べといつたら渡すから一所に來れといふので停車場の端の遠い室について往つた。先刻から待つて居つたフワツキノにはすぐ歸つて來るから停車場の入口に待つてくれと頼んで往つたのである。その室は人の住まない蜘蛛の巣のかゝつたやうな室で遠くの方に一人何か仕事をして居つた。こんな所で追剝にあつてもつまらんと思ひ出す暇があつた。かの男は紙片を持つて來て之に署名せよといふ。署名したら直に傘を返すかと思つたら手を出す。酒手を與へよといふのである。コノ馬鹿おれの方から時間の損害賠償をとる権利がある。オ前はフツシストか驚き入つたと怒つたら、此度は一日分の保管料を拂へといふ。争つて居つても損だと思つて〇〇リーラを拂つて洋傘を請取つて歸つた。入口に待つて居つたフワツキノの方が餘程可愛らしかつたか

ら此方に酒手をやつた。

今一つはウキーンに往つた時の事。H先生の午餐に招かれてホテルからペートーヴエン街にゆく時であつた。散歩しながら歩行いてゆかうと思つたが少し後れさうになつたので廣場にある自動車溜りに寄つてタクシーを備つて往つた。シヨフェールは年の頃六十位の鼻の赤い顔の四角な白髪交りの短い髯をゴチャ／＼にはやして居つた。昔のドロシケ(辻馬車)の御者によくある人相だ。十二時半迄に大丈夫ゆけるだらうねといふ内にもうついた。少し早かつた。二階に上つてチリンと呼鈴を押すと知つて居る女中が出て来た。主人も夫人も未だお歸りになりませんがもうすぐお歸りになります見わたらお待たせしてくれといはれましたからと應接室に導かれた。あゝ仕舞つた、おみやげを包んで来た風呂敷包をタクシーに忘れて来た、が、落付いて『用事を忘れて来ましたから一寸出て直に戻りますから』と外に出た。タクシーは勿論居ない。とにかくの溜りに往かうと自動車を拾つて往つたが鼻の赤いジャカ／＼の髯の運轉手はいくらも居てどれと判然分らない。その時頭に電光の如く閃めいたのは先刻のタクシーの番號である。〇〇〇番と覺えて居る。客待をして居る運轉手に〇〇〇番のタクシーはまだ歸らないかと尋ねたらもう直に歸るはずですよといふ。うら／＼かな日をうけながら待つて居ると意氣揚々と警笛を鳴して〇〇〇番が戻つて来てしかも自分の立つて居る近くに留まつた。自分分は近よつて「君先刻は御苦勞、僕の包を返して呉れ」といつたらあゝこれでせうと彼の腰下の近く

から出してくれた自分は再び此正直な運轉手のタクシーに乗つてH先生の宅に往つた。

(福岡日々新聞昭和七年二月)

道富丈吉の墓

長崎といふ名は誠にゆかしい。幕府時代の複雑な外交關係で、此長崎といふ地は外觀的にも内面的にも興味ふかくせられた。司馬江漢の往つたのも、蜀山人の留つたのも、情緒深い長崎の歴史に引きよせられた爲だらうと思はれる。

先年村井弦齋氏が九州の土地を旅行した時、長崎の料理が一番甘味かつたといはれた。此れは支那料理、西洋料理が早くから這入て日本料理に取り入れられた爲ではないかと思ふ。獨り料理ばかりで無い、人情美に於ても長崎は實に味ふべきものがある。これは紅毛船や唐船が異國人を常に送り込み、外國人と接觸する機會が多かつた爲であらうと思はれる。

今年はお諏訪さんに往つた。赤星知事の案内で官舎の棧敷の上から昔懐しい傘鉾を見、チャルメラの悲哀な音調を聞いた。此お祭は三百年來歴史的に持續して来た國民祭で、昔は唐人も和蘭人も日本人と混つて棧敷の上で見て居つたさうだ。唐人が蛇踊を見チャルメラの音を聞いて泣いたとい

ふのは無理もない。今では知事さんが昔のお代官の格で、外人を主として招待せられ日本人との接觸を計つて居られるとの事である。

長崎は昔からして外人と日本人の融和接觸した土地であるから、随分喜劇もあり悲劇もあつたらうマダム、バツタアフライの如きも、かうした渦巻の中の産物と見られよう。お菊さんも同様に。之等は戯曲の中に現はれた人物であるが、道富丈吉は實在してをつた産物の一人である。

長崎の出島。舊い地圖に扇形になつて海中に突出して居つた小さな出島。そこは和蘭の商館の根據地で、永い間西洋の文物を日本に輸入した門戸であつた。しかし蘭人は此嶋から市中に出ることを容易に許されない。島と陸との間には橋があつて番人がついて居つた。日本人も中に入ることを許されない。唯日本人で自由に出入を許されたのは、通詞(通譯官)の外に、丸山の遊女だけであつた。

尤も丸山の遊女も、蘭館に出入するのは餘り好まなかつたらしい。それで餘り賣れないものが出入をしてをつたといふことである。蘭人と遊女との間に時々葛藤があつたものと見えて、文齋―長崎錦繪の元祖―の書いた繪に、紅毛人が遊女を赤裸にして身體中餘る隈無く刷毛で墨汁をぬつてをる所がある、元來は夕方入つて朝歸る筈の遊女が、段々と商館内に起臥するやうになつて來たものらしい。當時日本の國法として外國人の婦女を滞在せしむることを一切許さなかつた。文化十四年蘭人ブロンホフが妻女、乳母、下婢、幼兒を連れて出島に上陸した時、奉行は頑として之を拒んだ。やむ無く

次の便船まで出島に留ることを許され、遂に無情を怨んでジャバのバタビヤに出帆した例がある。此のブロンホフの妻女といふのが長崎人の好奇心をそゝつたと見えて、文齋などが好んで錦繪の畫題にした。

さて道富丈吉といふのは、文化五年出島和蘭商館の甲比丹ドゥフ(Doeth)と、日本人土井ようといふものゝ間に生れた混血兒であつた。甲比丹ドゥフといふ蘭人は、寛政十一年(1799)始めて日本に來り、出島商館の書記となつた。時に廿三歳の青年であつた。享和三年(1803)廿七歳で甲比丹となつたが、いふ迄も無く破格の拔擢であつた。

彼が文政四年(1821)日本の土地を離れる迄廿年以上出島に立籠つて、その間縦横に鬼才を振ひ、事を計ること慎密しかも事に當るや猛然として無敵であつた。本國がナポレオン第一世の爲に其の所領となり、日本幕府へ献上品諸大名の注文品輸入の一切杜絶したる間に立ち、諸強國の脅威を斥け和蘭商館の面目を保つたのは、大政治家の素質を持つたものといふべきである。

彼が出島に於て政治的辣腕をふるつた跡から考へれば、妻や兒供を振り捨てるのは尋常事の様におもはれるが、此英雄は其兒の將來に對して心配の餘り、色々の計畫を立てて糊口の患無からしめた。いざ出發といふ前に、長崎の市中に出かけて、十四歳になる丈吉と其母とに熱い接吻と緊い抱擁とを與へ、涙ながらに名残を惜んだ。十二月六日の寒空に「フラウ、アハタ」號は、此人を長崎の土地から

永久に引きはなした。

父のドウフは、丈吉七歳の時奉行に嘆願書を出し、白砂糖三百俵を呈し、代金千六百兩の利子四百兩を、年々給料として丈吉に給はらむことを願った。尤も役目につきては、始め最も便利と思ふ通詞にしたかつたが、反對があつた爲、目利役にして貰つた。今でいへば税關の官吏に當る。老中牧野備中守から許しが出て、文政四年八月(1821)丈吉は唐物目利に擧げられ、年金四百兩の外に、百兩づつ給せらるゝことになつた。

父は又丈吉が借財したり借財の保證人に立つことが出来ないやうに願ひ出て、これも許された。又父は丈吉の行末を思つて教訓書を與へ、通詞に和譯せしめて守らせたといふことである。

かやうに可愛がつて残して往つた丈吉は、父出發後三箇年ばかりたつて、文政七年十七歳を一期として此世を去つた。母のおようといふのが病身であつた爲此兒も弱かつたものと見える。此あはれな丈吉の墓が、今も長崎の皓臺寺といふ古い寺に残つてをる。

長崎の武藤長藏氏から數年前この丈吉の墓の話があり、其墓に蝶の紋がついてをるといふことを聞いた。私が蝶の採集家で、又蝶に關するものゝ蒐集家であるといふことを知つてをらるゝからである。此寺にその墓を探りたいといふ念は中々強かつた。漸く昨年十月お諏訪さんにかこつけて妻と一緒に此寺を尋ねた。武藤氏の外に古賀十二郎氏や横手貞護氏も一緒になつて案内された。

皓臺寺の庭から左手の裏門を抜けて墓所に出ると、山一面に大小の墓碑が並んで夕日に輝いて居る丈吉の墓まで上るのは妻には中々苦行である。可なりの登山であつた。山の中腹にある一寸とした墓守堂を過ぎて左に曲ると、直に丈吉の墓に達した。墓地は可なり廣く、土井一族の墓石が並んでをるのもあれば倒れて居るものもある。丈吉の墓は七八尺もある立派なもので、母のおようと法名が二列に並んである。

徳芳院 道富妙貴大姉

道富院 圓覺良通居士

前のは母のおよの法名で、後のは丈吉のである。

墓石の左側には、

俗名 道富丈吉行年十七歳

文政七年申正月十八日

とある。

此道富といふのは、父の姓 Dault を國音ドーフに移して、新しく日本姓を作つたものである。例令ば (Tower) が倉場となり、Robert が呂畑となつたやうなものである。最近出版された齋藤阿具博士の「ゾーフと日本」といふ單行本は、非常に有益な著述である。中に道富といふ姓に態々ミチトミと

振假名せられてあるから、何かよりどころがあるだらうと思ふ。しかし道富の子孫少くとも同姓を有する一族は今も長崎に残つて、何れも「ドーフ」と發音してをる。その當時の日本人には「ドーフ」がドーフと開けたものと思ふ。古賀氏の話によれば、公文書にも日本字にてドーフと書いたものがあるさうだ。

それから此墓石の前に左右に並んで居る四角の花立の左の方が、所謂蝶の紋所である。右の方の紋は新しい道富家の紋所で、HDの二文字を草書にくずし、之を圓い輪で圍んでをる。之は父のドーフがヘンドリック、ドッフ (Hendrik Doeff) といふ自分の名と名字の頭文字HとDをとつて作つたものと思ふ。中々面白い。墓所の石に刻れてあるから。

私は用意の石摺の道具をとりいだし、皆の加勢をうけて、墓碑も花立も皆石摺に摺つた。藪蚊にさされながら、妻は俳句などを考へてをつた。

秋晴や石摺たゞく皓臺寺

乾きあへぬ石摺はぐよ秋入日

異人は中々親切で、行末のこと迄も思つてくれるといふ感じは遊女の間にも起つたらう。丈吉の母が果して遊女かどうか分らぬ。多分遊女ではあるまい。しかし遊女でなければ蘭館には入らない。或は古賀氏のいはる、やうに、當時籍を遊女に假りて出入したものがあつたらしい。丈吉の母もそれでは

あるまいか。かうしたものが後世洋妾の濫觴となつたのではあるまいか。

(大正十二年二月、心の花第廿七卷二號)

洋傘

Iはステッキを携つて歩いたことがない、尤も家には色々の洋杖が押入に納つてあるのだが。

一體Iはなぜ洋杖を使はないのだらう。彼はステッキが嫌といふ譯でもない——しかしハイカラなペナ／＼したものを振り廻して歩いたりするのは大嫌なのだ——が、Iにはステッキを持ってない大なる理由がある。それは雨が降つても日がふつても洋傘を持つて歩く癖があるためだ。洋傘と洋杖と二つ持つてはあるけないから彼は洋杖はやめたのだ。彼に此習慣が出来たのは随分久しい以前からの事だ。Yは何時でもIに「こんな好天氣に何だつて洋傘をお持になるのか、押入にある洋杖を少しお使ひなさい」といつもいふのであつた。しかし「いくら晴天でも何時何處で雨にあはぬとも限るものか」と例によつて洋傘を撰ぶ。

その洋傘はいつも同じ形のものが要求されて居る。凡て把柄が圓やかに曲つて居るが彼は裝飾は一切好まない。殊にピカ／＼したものとヤコテ／＼したものは嫌であるから何れも自然木を曲げたものだ

眞直の柄の洋傘を持つたことがない。Iが彎曲把柄の洋傘を好むに至つた動機にわけがある。それは彼が洋傘を右手に握つて歩くのが嫌で必ず左の前腕深く引掛けて垂れて居るのが好きなこと。洋傘を忘れないやうに彼の常用の山高帽子の下にかけておく癖のあることなども理由の一つだが最も必要な動機は彼の身長の小さいといふことである。彼は五尺一寸二分の小男で高等中學校の體操には必ず最後に並んだものだ。彼は山に出かける時は勿論、道を歩く時でも蝶々や昆蟲や植物に目をつける癖があるが脊が低くて届かない時は、何か捕らうと思ふと樹の枝なり何なりを洋傘の柄で引き寄せ、て検査をすることにして居る。洋傘は彼にとつて野外用研究道具の一つである。Iはよくぬけ首の様にグラ／＼になつた柄の洋傘を持つてかへる。時には柄をなくした洋傘を持つてかへることもある。

先年米國に往く時のことT商店から太い柄の曲つた洋傘を新調した。彼はウキクトリアでもシャトルでも公園に入れば例の如く此の洋傘を左の腕にぶら下げて、珍らしい木があると洋傘の柄を一寸引かけて蛹を探したり葉を一枚とつたりするのであつた。ニューヨークにいた時にはさしも頑丈の洋傘もグラ／＼ぬけ首になつて居た。途中で柄がとれては不體裁と思つて、ホテルのボーイを呼んで翌朝迄に至急直させてくれと頼んだ。しかるにその晩方にかへると直ちに戸を叩いてボーイが來た。洋傘が直りましたといふ。道がは米國だ、誠に迅速だ、博多などは違ふと大いに悦んで請求の半ドルを渡した。米國は物價の高い所だから、柄をさし込んで結す丈に一圓もするのか。チト高過ぎるやう

だとは思つたがマア／＼よいわ、早く出來たのが氣に入つたとIは翌日大學病院や友人の訪問のプログラムを極めて寢床に就いた。

Iは大學の耳鼻科にC博士を約束の時間に訪ねた。助手が來て帽子と洋傘はこちらに御預りして置きますといふから渡すと洋傘の柄がコロッと抜けて仕舞つた。先方も氣の毒がつたがIも非常に赤面して頭の中で色々の推定や想像を逞くした。抜けた柄を見ると日本紙がまき付けてあり、何の修繕もしてなかつた。助手君は非常に氣の毒がつて直して置いてあげます。C博士はお待ちになつて居るかから早く逢つて來なさいといふ。Iは洋傘は任せておいてC博士に久濶を敘しクリニックを案内してもらつて元の室に歸ると助手君は額から汗を流して細工をして居る。彼の周邊には鑿や槌やメスやピンセットやガーゼの切屑が雜然としてある。彼は反射鏡を被つて、丸で根治手術でもやつた跡のやうである。彼は汗をふきながら「此の手術は耳よりも難しかつた。心棒に耳用ガーゼを巻いて少し堅めにして根治手術用の鑿でコン／＼打ち込んだ。半分計り這入つてから、どうしても柄の孔に這ひらなくなり、抜かうとしても抜けなくなつた。やつと抜き取つて反射鏡で耳の孔でも覗くやうに、柄の孔の底を検査したら、この通り西洋で見たことのない紙片が出た」と彼はIにピンセットでつまみ出した紙片を示してくれた。「それからやり直したから割合に時間がかゝつた。今卷いたガーゼの端が見えないやうに切つて居る所だ」とガーゼのほつれて食み出した部分をメスで丹念に切つて居つた。Iは

誠にすまないと禮をいつたが心中には宿やのボーイがおれを馬鹿にしてゴマかしたといふ無念さと日本製の製品がわるいといはれる危惧とが胸に充ちた。助手君は「プロフェツサアもう大丈夫です決してぬけません。私が十分打ち込んだから」と繰り返していつて居つた。Iは餘程洋傘を買はうかと思つたが、洋傘の地は日本が一番よい筈だ、外國で洋傘など買はぬと極めて歐洲各地の旅も此洋傘ですました。

Iは中々ネバリが強く一度いひ出したことやり出したことはすてない癖なのだ。彼がYからいくら冷笑かされても山高帽を捨てない所や、スピートの世の中に人力車を廢めぬ所など彼の性質の片鱗を現して居る。勿論IにはI一個の理屈は持つて居るので決して漫然と仕事をするのではないのである。歸朝してから米國で友人が修繕してくれた洋傘をまだ使つて居つた。人力車にのつてもIは洋傘を放さないのである。車に乗つて往復するのに洋傘はいるまいと思はれるだらうが、それはいつか雨のふる日に博多のある交叉點で車を覆されて車體が毀れたことがあるのだ。やむなく雨中をぬれて歩かなければならなかつた苦い經驗を持つIは毎日、さしたことはない洋傘を人力車に積み込むのであつた。

ある時、Iは何かの都合で例の洋傘を携へて電車に乗つて病院に往つた。出勤時間で随分込み合つて居る。Iは可なりの潔癖家で、吊革をつかむのが嫌いだ。尤もIは外出に手袋を放したことはな

いのだ。始めの内は吊革につかまらないで居つたが萬町の曲り角で大揺れをするから、例の洋行がへりの洋傘の曲つた柄を一寸吊革に引つけて洋傘の胴なかを握つて居つた。人込みで押される度に身體がグラ付き思はず洋傘に吊り下ることが度々あつた。ニューヨークの助手が大丈夫といつてくれた柄が搖ぎ出した。成るべく洋傘にもたれないやうにして居つたが東公園の入口の曲り角でたうとう抜けてしまつた。ぬけた柄が吊革にぶら下つて残り、助手君の巻き付けた耳のガーゼが長々とたれ下つた。向へ側でいたづらをして居つた子供迄が吊革と一緒に搖れる柄を見て笑つて居るのである。さすがのIもこの歴史つきの洋傘の修繕は斷念してM商店から新しいのを買った。

ある日I君の室に話しに行つた。用事がすんで歸りがけに洋傘をとつて例の如く左の腕にかけ、ドアを押さうとするとI君があわたとしく「君それは僕の洋傘だよ。どうするのだ」といふ。「あゝさうか、君のか、僕のとよく似てゐたものだから失禮した」と釋明して出て見るとIの傘はちやんと車の上で待つてゐた。

ある朝、例の人力車で病院に行く時女中が此洋傘は何だか違ふやうだといふ。Iは細いところもあるが割合無頓着でもある。しかし何所か違ふやうだ、第一色彩の感じが違ふといつて直感的の斷定を下して居る。さういへば昨夜ある所に會合があつて、下足番とK君が傘のことでは何かいひ合つて居つたやうであつた。Iは番人に渡されるまゝに受取つて歸つたその時取違へたのではなからうか。それに

してもよく似た傘があるものだと思つて居つた。

ある晩、レストランで懇親會があつた。食事が果て、からIは他の人々と話しをして居つた。一、二の人は既に歸つた。するとボーイが五六本ばかりの傘を一抱にしてバアロアに來た。不思議にもその洋傘はIの洋傘と全然同型同質のものばかり、曲つた籐の柄の色のニユアンスが少し違つて居る位のものだ。ボーイは此傘はどなたのですかときいて歩く。Iは黙つて見て居つた。甲は僕のは柄の端に名前のイニシアルが彫りつけてあるからと取つた。乙は僕のは中に細いリボンがくゝつてあるからと取つた。三ツ四ツは持主が分つた。Iは黙つて居つた。そして残つた洋傘を貰つて歸つた。家でこの話をしたらYが笑ひ出した。それはM商店の特價品が方々に配られたのであつた。Mを呼んで別まぎれない洋傘を買はうかとも思つたがやめた。Iは頭の中でかうして變つて居る内に裏に斑點の二つある本物が戻つて來るかもしれないし、又自分は用心の爲に持ち歩くので實際さす機會は殆んどないのだからどれでもよいと思つた。そして毎日誰のだか分らない洋傘を人力車に積んで病院に通つてゐる。

(福岡日々新聞 昭和七年一月)

マジヤルの首都ブダペストより

千年以前に亞細亞の高原から羅馬の文明にあこがれて西へ西へと進んで歐洲の地に這入り確乎たるマジヤル王國を樹てた、七種族の蒙古人種が即ち、今のハンガリーの祖先である。北米の移民問題でさへ中々むつかしいのに千年以前に大志を抱いて故郷を見捨てた蒙古人種の決心と大膽とには驚かざるをえない。北には「スラブ」人種あり、西には「ゲルマン」人種あり、南には新月旗の土耳古人種あり何れも其文明と強大とを以て誇として居つた。其側面を衝いて一大新興國を立てるといふのは空想といふより外はあるまい。しかるに彼等はそれを實現し西歐の文明人種から驚と恐と嫉とを以て睨まれた。マジヤル人種が武勇に於て卓越して居つたことはいふ迄もないが馬上に於て取つた天下は更に劍戟を以て奪はれるのだ。マジヤル王國が西歐人種に優るとも劣らない文明を建設したのは決して武辨一方の民でなかつた證據である。約三十年前、盛大な建國一千年祝賀會を開き、廣大な記念物を建設し後世に残さむとした彼等は建造半にして大戦に遇ひ、一敗地にまみれトリアノン條約に依つて極めて慘酷なる宣告を受けそれに服従せなければならぬはめに陥つた。建國千年の間、彼等は二三回非常な打撃を受け滅びんとして又盛り返して來た。しかし此度のやうな著しい打撃を受けたことはなかつたらう。

ハンガリー王國の領土は大戦前に於て三二五、四四一平方「キロメートル」を算し人口は二千萬以上にあつたのが平和條約に依つて面積は九二、八三三平方「キロメートル」に縮小され、人口は約八百萬に減じた。即ち土地に於ては七十一%を失ひ人口に於ては六十三%を減じた。つまり三分の一に切りつめられた。しかも周圍の豊饒な、森林、鑛山、石炭を藏して居る土地を皆分割された。北はチエツコに取られ、東はルーマニヤに、南はユーゴスラビヤに西は伊太利にとられた。なほ西の一部は同盟國の奧太利に迄取られた。彼等は憤慨して、ハンガリーは動脈を切斷された、回復の見込がない。民族自決も何もハンガリー國の上には顧慮しないで恰も肉塊を豺狼の争ふがまゝに任せたと云つて居る。若、トリアノン條約を再開して正義の尺度でさばくにあらざれば永久の平和はどうして望まれやうと言つて居るが無理もないことと思ふ。戦前四個の大學を持つて居た彼等は二個の大學を領土と共に失つた。さうして大學教授は逐ひ出された。余の知人も此運命に逢つた一人である。嘗て佛蘭西の史學大家ミシュレ (Michèle) 氏はマジャル人種を歐羅巴の英雄と呼んださうであるが、佛の首相ブリアン氏はウングアルンの鮮肉を深く切斷しなければならぬと公言したさうである。優越なるものが嫉と恨とを買ふことは東西古今同一轍といはねばならぬ。しかし今に恢復の時は来るだらうと自分が、王城の夜園に散歩した時慰めたのにK氏は今度はむづかしからうと涙ぐんだ。

自分は千九百五年かに一度來たことがある。その頃は専門家としてオノヂ、フナン、ナブラチール、

ツキルリッゲル諸氏が居つたが、皆故人となつた。千九百九年ブダペストに萬國醫學會の開かれた時自分は往かれなかつたが、耳鼻科の宿題報告を擔當した爲、報告文を送つておいた關係上、此土地には知人が割合多かつた。同じ人種といふ關係で此土地の人々は我々に非常な厚意を持つて居つた。自分は此度の旅行で新たにハンガリーに對する知識を増し又日本の専門家との關係を一層密にすることが出來た。日本からオノヂ教授の下に勉強に來て居つたのは金杉博士で、同氏の寫眞は今でもイスラエル病院の喉科の醫員室にかゝつて居る。世間ではブダペストを稱して小巴里プチパリといつて居る。成程町の美しい所、活氣のある所は似て居るが、雄大なダニユーブ河を控へて居る所、市街が凸凹變化して居る幾多の丘陵に跨つて居る所、市の周圍に到る處に鑛泉の湧き出て居る所は巴里の逆も及ばない所である。街上の人を見れば西洋人ばかりで、蒙古人の形跡が少しも見えない。しかし芝居にいつて上から眺めると随分髪の毛の黒い人、眼色の褐色を呈して居るものがある。病院の外來に往つてみると、日本人かと思ふ様なものもある、しかし鼻が少し高い。「ブロンデ」も随分ある。しかし此は北歐人種の混血から來たもので純粹の蒙古種ではない。千年の月日を経た内に自然々に西洋種が混つて來たから今のハンガリー人を指して直に蒙古人種といふ事は出來ない。しかし幾千年立つても血液のどこかに蒙古型の残つてゆくことは疑無い。自分が今度來て見て感じた事が三つある。

第一は、大戦後、各國は競つて共和政體を取つた。君主國は大體少くなつた。奥國しかり獨逸國し

かり。しかるに此ハンガリー國は共和政體をとらないで王國の形をとつた。しからば王はあるのかといへば王は無い。かの巍然として聳じて居る王城はどうなつて居るのかといへば今は留守で王の歸るのを待つて居るのだといふ。王になるべき人はなほ幼少で西班牙に捕虜の身となつて居る。その母君は所を異にして流浪の身で國に歸ることが出来ない、此國民は王國を立て、其歸らるゝ日を待つて居る、執政者が代つて國を治めて居る。此美しい民情を聞いて自分は王城の月に涙無きをなかつた。

明月や城のあるじは何時歸る　　ゐの吉

王と民との關係は非常に親密なるものがあつた。ステフワン王の大英斷でハンガリーは千年の基礎を定めることが出来たのだ。蒙古から移住して來た人種は異教信者であつた。それで、どうしても西歐人種と携へて行くことが出来なかつた。それを觀破したステフワン王は人民を皆基督教信者にかへた。しかし羅馬教にするか、希臘教にするかといふことは大問題であつた。王は「ローマンカトリック」にした。そして羅馬法王の配下についた。若、希臘教を取つて居つたら露國の道づれになつたに相違ない。千二百二十二年には憲法を發布して君民同體の實を擧げた。王の即位する時、戴冠式がすめば、寺から廣場に出て、小高き所にある王座に登つて民衆に誓文をよむことになつてをる。その壇を見た、こんな關係で國民は王が居なくとも王國を立てたものだらう、そこに奥ゆかしい所がある。

第二は、ハンガリーの國語である。此國語が他の歐洲語と全然系統を異にして居ることは分つて居るが、羅馬字で發音を寫して書いて居る所に、余の注意を惹いた。誰が羅馬字を採用したのかといふと英主ステフワン王が宗教を羅馬「カトリック」に換へると同時に今迄使つて居つた象形文字を捨て、羅馬字を採用したものだ。これで無ければ歐洲人との交通はむづかしいと見たものだらう。日本では今騒いで居ることをハンガリーでは千年前に片付けて仕舞つたのだ。羅馬の發音に據つたものだから言語學上羅馬の發音を調べるにも参考となるだらう、又東洋の發音を表すのにどうしたらよいかといふことに就いて大に師とすることがあるだらう。又文法上後置詞のあるのは日本と同じことだ、前置詞は無いのだ。之を名詞の語尾の變化として一語にとり入れてゐる。之は非常に面白いやり方だと思ふ。近來土耳其で土耳其古文字では分らないから羅馬字でかき現はすことが輿論となつた。所が發音を佛國に據らうか、英國に倣はうかといふ事に就いて大分議論があつたが結局東洋語を最も早くから書き表して居るハンガリーの發音に據らうといふことになつたさうだ。此から特種の文字をもつて居る國々が羅馬字を採用する場合にハンガリー語は必ず注目されるものだらう、又されねばならぬものだと思ふ。

第三には耳鼻科領域に於て特に傑出した人々を出したことである。喉頭鏡を臨床的に應用したツェルマックのブダペストに居たことは誰も知つて居ることと思ふ。三半規管の生理に最も早く注目して

現今の學說の基礎を作つたのはヘージエス (Högyes) である。ハンガリー語で書いた爲永く知られず
に居つた。バラニーもハンガリー人である。ハエックも然り、ノイマンも然り、ポリッツェルも亦然
り。是等の諸氏は皆ハンガリー語で話せるのだ。又専門書は既に百年以前に出版されて居るが、ハン
ガリー語の爲に注意されて居ない。

自分は此度専門科の病院を市内で六つ見た。二つは大學の病院で何れも耳鼻科は獨立の一科を爲し
て居ない、外科の中で一部を構成して居る。必修科目にはなつて居るが試験科目には耳鼻科の目が
ない。極めて虐待されて居る。之に反して市立病院や其他では、耳科も喉科も分立して中々大きくや
つて居る、大學よりも大きい。假令ば市外にある (Johann Hospital) の如きは耳科と喉科と全く獨立し
た新しい建物を持つて居る、殊に喉科に附屬して居る喉頭結核病棟の如きは百二十も病床を有して居
る。主任は Prof. Salfanek である。博物館の裏にある Israel Hospital の内には耳科と喉科と獨立し
て居る。喉頭科の方は故 Prof. Onodi の後を繼ぐ Dr. Pollatschek が居る。設備も非常によい。有
名なボカイ (Prof. Bokay) の小兒病院には耳鼻喉科部が獨立して Prof. Pauz が居る。氏は嘗て自
分のフライブルヒ大學勤務中キリアン師を訪ねて來た關係上、舊知の間柄である。其他新進諸氏の中
には Dr. Rehi, Kelemen, German, Krepuska 等の人々がある。殊にケレメン氏は少壯氣鋭、熱心
な研究者であるから矚目すべき一人であると思ふ。

Dr. Kelemen 氏の居る「クリニック」の外科にはバカイ教授 (Prof. Bakay) が居つて食道の胸腔外成
形術に成功して居る、二三人の患者を見たが、胸部の皮膚で管を作り之を皮下に埋め、上は食道入
口部につなぎ、下端は十二指腸に結付けてある。胃と小腸との吻合をやつて居る。當地に食道腐蝕患
者の多いのは驚いた、市立 Rokus Hospital には食道腐蝕患者や自殺患者のみの一室があつた。それ
は女の室だが二十人も居つた。又生々しい糜爛の苦悶者から、既に癥痕狹窄を呈して居るもの何でも
ある、苛性「ソーダ」、塩酸、硫酸が多い、又針を澤山のんだのや「アスピリン」を二十粒のんで中毒
して居るのもあつた。男の方にも澤山あるさうだ。皆失戀や生活難からの自殺未遂者といふ事だ。食
道外科の進む理由があるなと思つた。當地は大戦以來經濟状態が非常に悪くなり、醫者の生活も逼迫
して來たから、ゆつくり研究の出来る人が少ないのは悲むべき事である。

(昭和三、九、二三、ベルグラードにて記) (耳鼻咽喉科、第二卷、第一號)

附記、此文章は其後ドクトル、ケレメン氏により獨逸語に譯されハンガリーの新聞に出た。

終

